

児童の自己意識と社会的スキル及びストレスコーピングが 自尊感情に及ぼす影響

吉 橋 由 香
田 倉 さ や か⁽¹⁾
吉 澤 寛 之
永 田 雅 子⁽²⁾

The influence that self-consciousness, social skill and stress coping of children give in their self-esteem

Yuka YOSHIHASHI

Sayaka TAKURA

Hiroyuki YOSHIZAWA

Masako NAGATA

(1) 日本福祉大学

(2) 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター

要 旨

児童の自己意識、社会的スキル、ストレスコーピング、自尊感情の発達的变化と、それぞれの相互関係を検討するため、小学校3年生から6年生の児童を対象にアンケート調査を実施した。結果、社会的スキルのうち、引込み思案行動は年齢とともに減少し、攻撃行動と向社会的スキルは性差がみられた。公的自己意識は、年齢とともに高くなり、公的自己意識・私的自己意識ともに女子が男子より高かった。ストレスコーピングは、問題解決やサポート希求など、年齢とともにより建設的なコーピングスタイルを獲得することが示された。自尊感情には性差がみられ、女子は学年とともに得点が減少した。また、自己意識の高低にかかわらず、向社会的スキルが高いほど、自尊感情が高くなることがわかった。

キーワード

自己意識、社会的スキル、コーピング、自尊感情

1. 目 的

近年、中1・小1ギャップ、不登校、反社会的行動、気分障害や不安障害など、子どものメンタルヘルスに関わる問題は多様化している。

傳田・賀古・佐々木・伊藤・北川・小山(2004)は、子どもの抑うつ問題を取り上げ、我が国の一般児童の約10%前後が臨床的に問題になるレベルの抑うつ症状を示し、その長期的予後に

※ E-mail yuka-y@ha.shotoku.ac.jp

においても、高い割合での再発や成人期の健康状態に悪影響を及ぼすと指摘している。

この指摘をうけ、嶋田(2008)は、子どものメンタルヘルスを低下させている要因に目を向け、その解決策を見出すことは喫緊の課題であると述べている。あわせて、子どものメンタルヘルスの問題を考える際には、心理的ストレスの枠組みから、大きく子どもを取り巻く環境の問題(ストレッサー)と個人の問題(ストレス耐性)と分けて理解することがその一助となる、と提案する。そして、ストレッサーを取り除くという発想のみでは、実効性のある具体的な援助にはつながりにくいため、ストレッサーに対する認知的評価の変容や具体的な対処行動(コーピング)、適応的な対人関係を促進する社会的スキルや問題解決スキル、問題を客観的に理解するためのセルフモニタリングのスキル、問題行動の進行を妨げるセルフコントロールのスキルやリラクゼーションのスキルを身につけるようなストレスマネジメント教育が有効であるとしている。

嶋田(2008)が提唱している、コーピング、社会的スキル、問題解決スキル、セルフモニタリングスキル、セルフコントロールスキル、リラクゼーションスキルについて、各スキルの発達を測定できるよう、我が国においてもいくつかの尺度が開発されてきている。その中でも、ストレスマネジメントに関連するスキルとして、社会的スキル、セルフモニタリング、コーピング方略の尺度が開発され、検討がおこなわれてきた。

嶋田・戸ヶ崎・岡安・板野(1996)は、社会的スキルを適切に評価するための「小学生用社会的スキル尺度」を開発している。この尺度は、「向社会的スキル」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」の3因子、合計15項目からなる。そして、ストレッサーとストレス反応、社会的スキルの関連を分析し、適切に社会的スキルを獲得している児童ほど、ストレス反応の表出が少なかったと考察している。ただし、調査は小学校4年生から6年生を対象として実施されているが、学年や性差による分析は行われていない。

大竹・島井・嶋田(1998)は、大人と子どものストレスコーピングの在り方は異なることを指摘し、小学生のコーピング方略を明らかにするための「コーピング尺度」を作成している。因子分析の結果、「問題解決」「行動的回避」「気分転換」「サポート希求」「認知的回避」「情緒的回避」の6因子、40項目からなることが確認されている。さらに、大竹・島井・曾我(2001)は、同じ因子構造で各2項目からなる「小学生のコーピング尺度短縮版」を開発している。そして、より適切なコーピング方略を用いることが、身体的健康の維持に影響を及ぼしていることを明らかにしている。大竹ら(1998)も、小学校4年生から6年生までを対象とし、健康状態などとの関連を検討しているが、コーピング自体の加齢に伴う発達の変化については、検討されていない。

ストレスマネジメントを行うためには、問題解決スキルを身につけることが非常に重要であり(Sharma, 1998)、子どもに対するストレスマネジメント教育においても、問題解決に焦点をあてたアプローチが最も有効であるとされている(Lohaus, Kein-Hebling & Snebar, 1997)。McCreary, Young, Jones, Pasquariello, Fife, Grosz, Stewart & Desmangles (2011)は、小学生を対象に、まず自分が持っている力、強みを認識させるというプロセスを経て、学校やストレスに対処するための問題解決スキルを教える心理教育プログラムを実施し効果をあげており、スキルを身につけさせるためには、自己の特性に注目し、意識するということが土台になるであることがわかる。

ここで、自己への注目や意識を対象とする概念には、セルフモニタリングがあげられる。セルフモニタリングとは、社会的場面からの社会的な適切さに関する情報に基づいて、自分の行動を管理、統制することと定義される(Snyder, 1974)。西岡・堺(2007)は、小学生への社会的スキル訓練を実施し、セルフモニタリングに働きかけることで、向社会的スキルを身につけること

や、抑うつや怒りといったストレス反応を減少させる可能性を示唆している。これらのことから、適切にストレスマネジメントを行うためには、ただ、スキルを身につけさせるのではなく、自分自身の特徴や行動に意識を向ける「自己意識」に着目することが必要と考えられる。

桜井（1992）は、自己に注意を向けやすい特性としての「自己意識」を取り上げ、小学生5・6年生を対象にした「児童用自己意識尺度」を作成し、検討している。そして、自己の外見や行動、他者に対する言動など他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する「公的自己意識」と、自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける程度に関する「私的自己意識」に区別した（桜井，1993；山田・斎藤，2006）。斎藤（2006）は、「公的自己意識」が高いとセルフモニタリング傾向が高くなると述べており、山田・斎藤（2011）は、大学生を対象とした調査から、私的自己意識が高いほど、セルフモニタリング傾向が高くなるとしている。これらのことから、向社会的スキルの獲得に必要なセルフモニタリングの発現には、自己の外的な側面および内的な側面に注意を向ける「自己意識」の高まりが重要であることが示唆される。

桜井（1992）による「児童用自己意識尺度」は、公的自己意識と私的自己意識の2因子合計19項目からなる。学年、性差による分析を行った結果、公的自己意識について、5・6年生ともに、女子は男子より得点が高く、男子では5年生の方が6年生よりも得点が高いが、女子は学年差が見られなかった。また、私的自己意識については、5年生では性差が見られないが、6年生において女子は男子よりも得点が高く、女子は5年生よりも6年生で得点が高くなることがわかった。ただし、本調査は単一の小学校の生徒を対象に行われており、一般化可能性に限界があるといえる。

また、社会的スキルと自己意識の関連について調べた研究も存在する。小松・飛田（2008）は、一般児童に対する社会的スキルトレーニングや社会的スキル教育が近年急速に普及し、実践研究として、その効果を明らかにする知見も多くみられるようになってきたが、社会的スキルが身についても、実際の生活の中で行動として現れていない、つまり、日常生活への般化の難しさが課題となっていると指摘する。そして、社会的スキルを身につけさせるだけでなく、社会的スキルの発現に影響する個人的要因と状況要因の両面を把握し、社会的スキルが実際に活用される条件を整えていく必要があるとした。そして、社会的スキルの発現と、自己肯定感を含む自己意識、学級環境評価との関連を検討した結果、児童が自分自身を肯定的にとらえているほど、また、学級の雰囲気や友達の様子を肯定的にとらえているほど、主に人間関係に関わる社会的スキルの発現についての自己評価が高くなると指摘した。ただし、小松・飛田（2008）でいう「自己意識」は、自尊感情や自己肯定感の概念にきわめて近く、いわゆる自己意識ではなく、自尊感情・自己肯定感との関連として解釈をし直す必要があると思われる。また、これに関連する研究として、自尊感情が社会的スキルに及ぼす影響について、寺島・児玉（2007）や吉川・飯塚・長崎（2001）において大学生に対する調査で検討されているが、いずれも、自尊感情が高ければ、社会的スキルも高まると述べる。これらの研究は、社会的スキルと自尊感情や自己意識とに関連があることを立証した研究として、とても興味深い。ただし、自尊感情と社会的スキルは相互関係にあると推察され、逆方向のベクトルとして、社会的スキルが自尊感情に与える影響についても検討すべきである。そして、自尊感情は、自己への関心が高まる思春期の時期に低下するとの指摘もあり（三枝，2001；梶田，1980）、自己意識の高まりによって、自尊感情が低下する可能性も検討する必要がある。

このように、ストレスマネジメント教育の必要性が指摘されてきているものの、ストレスマネジメントに必要なスキルが年齢段階でどのように身についていくのか、またそれぞれそれぞれのスキルが相互にどのように影響し合っているのかについては、未だ十分には検討されてきていない。

そこで、本研究では、ストレスマネジメント教育において中核となる、社会的スキル、ストレスコーピングに焦点を当て、加えて、この発現に関わるとされる自尊感情、自己意識について、それぞれ年齢による発達を明らかにすることを第一の目的とする。

さらに、社会的スキル、ストレスコーピングと自尊感情、自己意識との関係について、以下の仮説をもとに検討することを第二の目的とする。

本研究の仮説は以下のとおりである。

1. 自尊感情は、思春期に差し掛かる6年生で一度低下する。
2. 社会的スキルやストレスコーピング、自己意識は、年齢が上がるにつれて、得点が高くなる。
3. 社会的スキルが高いほど、自尊感情も高い。
4. 社会的スキルとコーピングスキルが低い場合、自己意識が低ければ自尊感情に影響はないが、自己意識が高まっている場合、自尊感情が低くなる。

2. 方 法

(1) 調査対象者：A県内にある公立小学校B小学校とC小学校の2校に調査を依頼した。異なる市町村にあり、地域性も異なるB小学校とC小学校を対象とすることで一般化可能性の向上を目指した。アンケート回答者は、3年生から6年生の児童873名であった。内訳は、B小学校3年生131名（男子63名、女子67名）、4年生124名（男子59名、女子64名、不明1名）、5年生101名（男子46名、女子55名）、6年生93名（男子49名、女子44名）、C小学校4年生156名（男子77名、女子79名）、5年生128名（男子68名、女子60名）、6年生140名（男子83名、女子57名）であった。

(2) 実施時期：2011年7月から8月に実施した。

(3) 手続き：アンケート調査を、学級毎に集団実施した。質問紙の説明、配布および回収は各担任教諭が実施した。

(4) アンケートの構成：

①社会的スキル尺度：嶋田ら（1996）で作成された「小学生用社会的スキル尺度」を用いた。本尺度は、「向社会的スキル」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」の3因子、合計15項目からなる。回答は、「ぜんぜんあてはまらない」から「よくあてはまる」の4件法で求めた。

②自己意識尺度：桜井（1992）で作成された「自己意識尺度」を用いた。公的自己意識と私的自己意識の2因子合計19項目からなる。回答は、「いいえ」から「はい」の4件法で求めた。

③コーピング尺度：大竹ら（2001）で作成された「小学生のコーピング尺度短縮版」を使用した。「問題解決」「行動的回避」「気分転換」「サポート希求」「認知的回避」「情緒的回避」の6因子、各2項目合計12項目からなる。回答は、「ぜんぜんあてはまらない」から「よくあてはまる」の4件法で求めた。

④自尊感情尺度：青島（2008）で作成された「自尊感情尺度」を使用した。小学校低学年でも理解でき、かつ短時間で実施できるように工夫されたもので、全9項目からなる。回答はそれぞれ

の項目に合わせて4件法で求めた(例:「1. じぶんのことが好き」という項目に対し、「とてもきらい」「すこしきらい」「まあまあすき」「とてもすき」の4件法)。

3. 結 果

(1) 各尺度の因子構造の検討

①社会的スキル尺度

嶋田ら(1996)で作成された「小学生用社会的スキル尺度」15項目で因子分析を行った。主因子法により3因子を抽出し、プロマックス回転を施した。回転後の各項目の因子負荷量は、表1に示した。嶋田ら(1996)と同様、「向社会的スキル」に関する7項目、「引っ込み思案行動」に関する4項目、「攻撃行動」に関する4項目の3因子構造となったため、各因子名もそのまま採用することとした。

表1. 社会的スキルの因子分析結果 (n=810)

	因子		
	1	2	3
1. 向社会的スキル ($\alpha=.81$)			
3 友だちがしっばいしたら、はげます。	.73	.11	-.07
1 困っている友だちを、たすける。	.72	.08	.02
6 友だちのたのみをきく。	.67	.04	.05
13 友だちに、しんせつにする。	.59	-.23	.03
7 ひきうけたら、さいごまでやる。	.55	-.10	.03
9 あいての気持ちを、考えて話す。	.54	-.24	.05
11 友だちの意見に反対するときに、わけをいう。	.50	.14	-.05
2. 攻撃行動 ($\alpha=.66$)			
2 友だちに、らんぼうな話し方をする。	.04	.70	-.05
14 友だちに、けんかをしかける。	.11	.60	.03
4 なんでも、友だちのせいにする。	-.02	.54	.01
15 自分のしてほしいことをむりやりやらせる。	-.03	.48	.10
3. 引っ込み思案行動 ($\alpha=.63$)			
12 友だちとはなれて、ひとりだけで遊ぶ。	.01	.06	.70
8 遊んでいる友だちの中には、入れない。	.02	-.02	.55
10 友だちの遊びを、じっとみている。	.08	.07	.53
5 休み時間に、ともだちと、よくしゃべる。(逆転項目)	.25	.08	-.39
寄与率 (%)	3.50	1.15	.94
累積寄与率 (%)	23.31	30.97	37.22
負荷量平方和	3.20	2.24	1.60

②自己意識尺度

桜井(1992)で作成された「自己意識尺度」19項目で因子分析を行った。主因子法により2因子を抽出し、プロマックス回転を施した。回転後の各項目の因子負荷量は、表2に示した。「1. 自分が正しいと思ったことは、やりとげようと思いますか」「3. ものごとを、あまりじっくり考えられない方ですか。」「7. みんなと意見がちがっても、自分はぜったいこうだと思う、ということがありますか。」「10. はじめて会った人には、なるべく自分のよいところばかりを見せようと、努力しますか。」「12. 人が見ていると、自分をよく見せようとしてしまいますか。」「18. さんせ

表2. 自己意識の因子分析結果 (n=795)

	因子	
	1	2
1. 公的自己意識 ($\alpha=.78$)		
17 自分が他の人にどう思われているか、気になりますか。	.80	.02
11 自分についてのうわさが気になりますか。	.77	-.12
2 みんなの前で何かするとき、自分の動作やかっこうが気になりますか。	.59	-.04
4 何かしているとき、みんなが自分を見ているような気がしますか。	.58	-.07
15 おとなが自分のことをどう思っているか、気になりますか。	.45	.14
16 かみがたや服そうには、気を使いますか。	.40	.18
2. 私的自己意識 ($\alpha=.74$)		
9 ほかの人を見るように、自分のことを考えてみるがありますか。	.00	.68
8 自分のことを、じっくり考えてみるがありますか。	.02	.63
14 いま、自分がどんな気持ちなのか、考えるがありますか。	.13	.55
19 自分のしたことや言ったことを、あとから反省してみることができますか。	-.09	.52
5 気分がかわると、すぐに自分で気づくことができますか。	-.08	.46
6 自分がほんとうにしたいことは何だろうか、考えますか。	.07	.46
13 自分の考えを、はっきりさせておきたい方ですか。	-.02	.45
寄与率 (%)	3.51	.96
累積寄与率 (%)	26.96	34.38
負荷量平方和	3.01	2.88

い、反対を決めるとき、手をあげている人が多い方に、自分も手をあげてしまうことが多いです。]の6項目は、共通性と因子負荷量ともに低かったため、除外した。因子の構造は、桜井(1992)と同様の2因子構造であり、その項目内容は同じであった。よって、本研究においても、「公的自己意識」6項目と「私的自己意識」7項目とし、分析を行うこととした。

③ストレスコーピング尺度

大竹ら(2001)で作成された「小学生のコーピング尺度短縮版」の通り、6因子構造となることを確認するため、確認的因子分析を行った。6つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、十分な適合度を示したものの、認知的回避因子(「1. そのことをあまり考えないようにする」「11. どうしようもないのであきらめる」)に対して2項目から成る顕在指標からのパスに有意でないものが認められたため、当該因子を削除したモデルを再分析した。その結果、GFI=.97, AGFI=.93, RMSEA=.08, AIC=200.51となり、構造の異なるモデル比較に適したAICに顕著な値の減少が認められた。したがって本研究では、認知的回避を独立した因子と見なさず、それ以外の5因子によりコーピングの下位因子を構成した。結果を表3と図1に示した。

表3. ストレスコーピングの確認的因子分析結果 (n=839)

	因子				
	1	2	3	4	5
1. 問題解決	.71				
9 何がその原因かを見つける。	.60				
3 自分を変えようと努力する。					
2. サポート希求					
5 だれにどうしたらよいかを聞く。		.64			
8 人に問題のかいけつに協力してくれるようたのむ。		.70			
3. 行動的回避					
12 大声をあげてどなる。			.56		
4 誰かにいいつける。			.43		
4. 情緒的回避					
10 ひとりになる。				.51	
7 ひとりで泣く。				.74	
5. 気分転換					
6 ゲームをする。					.74
2 友達とあそぶ。					.36

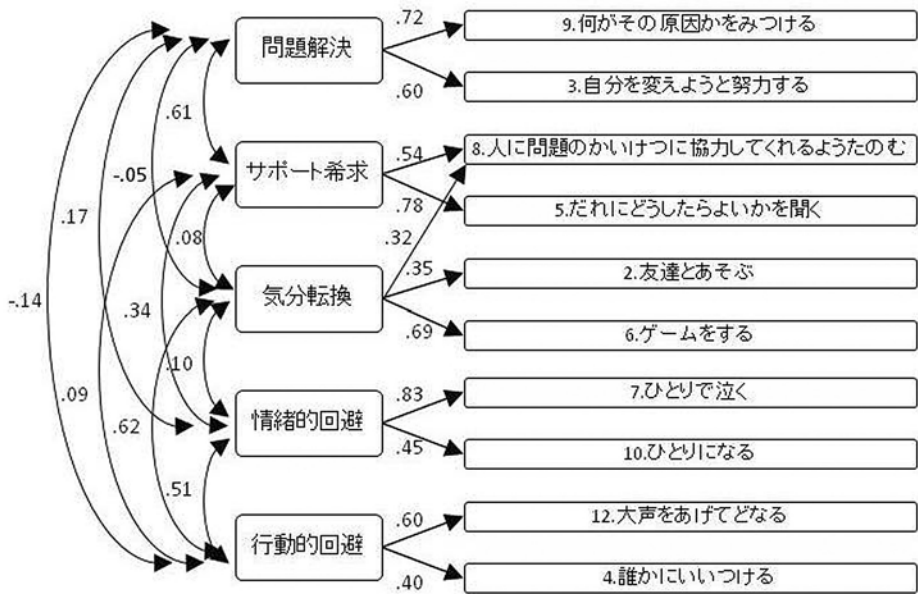


図1. 確認的因子分析のパス図

④自尊感情尺度

青島 (2008) で作成された「自尊感情尺度」9項目を因子分析した。主因子法により1因子を抽出し、プロマックス回転を施した。回転後の各項目の因子負荷量は、表4に示した。青島(2008)では、因子分析を行わず、教師によるアセスメントのための項目としてアンケートが作成されたが、本研究では、「自尊感情」として9項目を1因子として採用する。

表 4. 自尊感情の因子分析結果 (n=850)

		因子
		1
1. 自尊感情 ($\alpha=.78$)		
4	自分は大事な人間だ。	.75
5	自分にはいいところがある。	.72
3	家族に大切にされている。	.70
1	自分のことがすき。	.66
9	友だちに大切にされている。	.65
8	先生に大切にされている。	.59
7	学校にいと楽しい。	.53
2	自分は勉強ができる。	.45
6	失敗しても大丈夫。	.45
累積寄与率 (%)		38.47
負荷量平方和		3.46

(2) 各尺度得点の年齢による検討

①自尊感情の発達

自尊感情尺度の9項目の平均得点を表5に示した。自尊感情が思春期に差し掛かる6年生で一時的に低下するかどうかを確認するため、自尊感情尺度の得点について、学年と性別を要因とした2要因分散分析を実施した。分析の結果、交互作用が見られた。単純主効果の検定で、女子において学年が上がるにつれ有意に下降した ($F(3, 714) = 2.731, p < .05$)。また、3年生において男子が女子より得点が低く ($F(1, 714) = 5.332, p < .05$)、6年生において男子が女子より有意に高かった ($F(1, 714) = 4.462, p < .05$)。

表 5. 自尊感情尺度の平均得点 (標準偏差)

	3年生	4年生	5年生	6年生
男子	2.84 (0.63)	2.93 (0.67)	2.92 (0.51)	3.03 (0.52)
女子	3.10 (0.58)	3.05 (0.60)	3.01 (0.55)	2.86 (0.60)
全体	2.98 (0.61)	3.00 (0.64)	2.96 (0.53)	2.95 (0.57)

②社会的スキルとコーピングスキル、自己意識の発達

社会的スキルとコーピングスキル、自己意識の平均得点を表6. 7. 8に示した。社会的スキルおよびコーピング、自己意識が年齢とともに得点が上昇するか確認するため、それぞれの尺度について、学年と性別を要因とした2要因分散分析を実施した。

結果、社会的スキル尺度は、「引込み思案」において学年の主効果がみられた ($F(3, 714) = 5.44, p < .01$)。多重比較の結果、3年生が5年生、6年生より有意に得点が高かった (それぞれ $p < .01$)。また、性別の主効果が「攻撃行動」 ($F(1, 714) = 24.75, p < .01$) と「向社会的スキル」 ($F(1, 714) = 57.85, p < .01$) においてみられ、「攻撃行動」は男子の得点より女子の得点より点が高く、「向社会的スキル」は女子の得点より男子の得点より高かった。

コーピングについては、問題解決において学年の主効果がみられ ($F(3, 714) = 9.15, p < .01$)、

表6. 社会的スキル尺度の平均得点 (標準偏差)

	3年生	4年生	5年生	6年生
向社会的スキル				
男子	2.84 (0.55)	2.90 (0.62)	2.81 (0.52)	3.00 (0.59)
女子	3.17 (0.53)	3.15 (0.57)	3.22 (0.49)	3.28 (0.41)
全体	3.01 (0.57)	3.03 (0.61)	3.02 (0.54)	3.13 (0.53)
攻撃行動				
男子	1.67 (0.61)	1.61 (0.56)	1.69 (0.47)	1.61 (0.53)
女子	1.42 (0.56)	1.44 (0.51)	1.46 (0.47)	1.49 (0.36)
全体	1.54 (0.60)	1.52 (0.54)	1.57 (0.48)	1.55 (0.46)
引っ込み思案				
男子	1.78 (0.60)	1.55 (0.57)	1.48 (0.58)	1.39 (0.54)
女子	1.77 (0.68)	1.75 (0.67)	1.61 (0.52)	1.66 (0.56)
全体	1.78 (0.64)	1.66 (0.64)	1.55 (0.55)	1.52 (0.56)

3年生が4年生, 5年生, 6年生よりも得点が低かった (すべて $p < .01$)。また, サポート希求において, 学年の主効果がみられ ($F(3, 714) = 4.65, p < .01$), 3年生が4年生, 5年生よりも得点が低かった (それぞれ $p < .01$)。「サポート希求」($F(1, 714) = 6.59, p < .01$), 「情緒的回避」($F(1, 714) = 24.19, p < .01$), 「気分転換」($F(1, 714) = 65.68, p < .01$)において, 性別の主効果が有意であり, 「サポート希求」と「情緒的回避」は男子の得点より女子の得点が高く, 「気分転換」は男子の得点が女子の得点よりも高かった。

自己意識尺度は, 「公的自己意識」において学年の主効果がみられ ($F(3, 714) = 3.149, p < .05$), 多重比較の結果, 3年生が6年生よりも得点が低かった ($p < .05$)。また, 「公的自己意識」($F(1, 714) = 100.30, p < .01$), 「私的自己意識」($F(1, 714) = 22.40, p < .01$)ともに性別の主効果が有意であり, いずれも女子の得点が男子の得点よりも高かった。

表7. コーピング尺度の平均得点 (標準偏差)

	3年生	4年生	5年生	6年生
問題解決				
男子	2.40 (1.01)	2.71 (0.87)	2.69 (0.76)	2.89 (0.84)
女子	2.39 (1.02)	2.86 (0.83)	2.87 (0.83)	2.98 (0.80)
全体	2.40 (1.01)	2.79 (0.85)	2.78 (0.80)	2.93 (0.82)
サポート希求				
男子	1.96 (0.86)	2.35 (0.95)	2.25 (0.84)	2.11 (0.86)
女子	2.06 (0.91)	2.35 (0.85)	2.50 (0.86)	2.46 (0.84)
全体	2.01 (0.88)	2.35 (0.90)	2.38 (0.86)	2.27 (0.87)
行動的回避				
男子	1.80 (0.82)	1.65 (0.77)	1.51 (0.54)	1.60 (0.72)
女子	1.63 (0.85)	1.58 (0.68)	1.64 (0.63)	1.51 (0.57)
全体	1.71 (0.84)	1.61 (0.73)	1.58 (0.59)	1.56 (0.66)
情緒的回避				
男子	1.87 (0.85)	1.83 (0.91)	1.64 (0.67)	1.69 (0.82)
女子	1.99 (0.97)	2.09 (0.90)	2.15 (0.89)	2.13 (0.91)
全体	1.93 (0.91)	1.97 (0.91)	1.90 (0.82)	1.90 (0.89)
気分転換				
男子	2.74 (1.05)	2.97 (0.96)	2.93 (0.78)	2.88 (0.94)
女子	2.36 (0.85)	2.34 (0.90)	2.36 (0.75)	2.28 (0.70)
全体	2.54 (0.97)	2.64 (0.98)	2.64 (0.82)	2.60 (0.89)

表 8. 自己意識尺度の平均得点 (標準偏差)

	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
公的自己意識				
男子	2.17 (0.85)	2.20 (0.73)	2.18 (0.66)	2.41 (0.74)
女子	2.65 (0.76)	2.81 (0.78)	2.87 (0.78)	2.93 (0.65)
全体	2.42 (0.84)	2.52 (0.82)	2.54 (0.80)	2.65 (0.75)
私的自己意識				
男子	(2.59) 0.76	(2.66) 0.66	(2.54) 0.61	(2.74) 0.64
女子	(2.76) 0.53	(2.90) 0.61	(2.85) 0.69	(2.95) 0.61
全体	(2.68) 0.65	(2.79) 0.64	(2.70) 0.67	(2.84) 0.63

(3) 社会的スキル・コーピング方略と自尊感情および自己意識の関係について

①社会的スキルと自尊感情の相関

社会的スキル尺度と自尊感情尺度の関連を検討するため、相関分析を実施した。それぞれの相関係数を表9に示した。分析の結果、自尊感情と向社会的スキル ($r = .461, p < .01$), 攻撃行動 ($r = -.328, p < .01$), 引っ込み思案行動 ($r = -.305, p < .01$) すべてとの間に有意な相関がみられた。なお、男女別にも実施したが両性ともにほぼ同様の結果が得られた。

表 9. 社会的スキルと自尊感情の相関係数

	攻撃行動	引っ込み思案	自尊感情
向社会的スキル	-.32**	-.22**	.46**
攻撃行動		.20**	-.33**
引っ込み思案			-.31**

** $p < .01$ * $p < .05$

②社会的スキルおよびコーピング方略が自己意識の高低によって自尊感情に及ぼす影響

社会的スキルと自尊感情の関係に、自己意識が調整変数として機能するかを検討した。はじめに、自己意識による群分けを行うため、私的・公的自己意識の2変数を用いたクラスタ分析(平方ユークリッド距離, Ward法)を実施した。3から6クラスタを検討し、解釈可能性から4クラスタを採用した。クラスタ(4水準)と公的・私的自己意識(2水準)を要因とした2要因混合計画の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であり($F(3, 718) = 221.014, p < .01$), 多重比較の結果、すべての単純主効果が有意(すべて $p < .01$)だった。平均値を参考に4群の特徴が確認され、公的自己意識が高く私的自己意識が平均的な群152名(以下, 公高私中群), 公的自己意識と私的自己意識がともに高い群117名(以下, 公高私高群), 公的自己意識は平均的で私的自己意識が高い群201名(以下, 公中私高群), 公的自己意識と私的自己意識がともに低い群252名(以下, 公低私低群)に分けられた。次に、クラスタ群ごとに各社会的スキルとコーピン

表10. 社会的スキル・コーピング方略から自尊感情への重回帰分析結果

	社会的スキル			調整済 F^2		
	向社会的スキル	攻撃行動	引っ込み思案行動			
自尊感情						
公高私中群	.20 *	-.20 *	-.21 **	0.20		
公高私高群	.32 **	-.11	-.30 **	0.25		
公中私高群	.21 **	-.15 *	-.23 **	0.16		
公低私低群	.51 **	-.24 **	-.06	0.39		
<i>M</i>	3.13	1.55	1.61			
<i>SD</i>	.53	.51	.60			
コーピング方略						
	問題解決	サポート希求	行動的回避	情緒的回避	気分転換	調整済 F^2
自尊感情						
公高私中群	.29 **	.01	-.24 **	-.08	.03	0.15
公高私高群	.07	.23 *	-.11	-.18 *	.19 *	0.15
公中私高群	.12	.13	-.28 **	-.19 **	.04	0.16
公低私低群	.34 **	.07	-.28	-.03 **	-.04 **	0.20
<i>M</i>	2.77	2.29	1.60	1.93	2.61	
<i>SD</i>	.87	.88	.69	.88	.91	

** $p < .01$ * $p < .05$

グ方略を説明変数、自尊感情を基準変数とした重回帰分析を実施した。結果を表10に示した。社会的スキルについて、公高私中群では、向社会的スキルが自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .05$)、攻撃行動 ($p < .05$) と引っ込み思案行動 ($p < .01$) が負の影響を及ぼしていた。公高私高群では、向社会的スキルが自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .01$)、引っ込み思案行動が負の影響を及ぼしていた ($p < .01$)。公中私高群では、向社会的スキルが自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .01$)、攻撃行動 ($p < .05$) と引っ込み思案行動 ($p < .01$) が負の影響を及ぼしていた。公低私低群では、向社会的スキルが自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .01$)、攻撃行動が負の影響を及ぼしていた ($p < .01$)。コーピングについて、公高私中群では、問題解決が自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .01$)、行動的回避が負の影響を及ぼしていた ($p < .01$)。公高私高群では、サポート希求と気分転換が自尊感情に正の影響を及ぼし (ともに $p < .05$)、情緒的回避が負の影響を及ぼしていた ($p < .01$)。公中私高群では、行動的回避と情緒的回避が自尊感情に負の影響を及ぼしていた (ともに $p < .01$)。公低私低群では、問題解決が自尊感情に正の影響を及ぼし ($p < .01$)、情緒的回避と気分転換が負の影響を及ぼしていた (ともに $p < .01$)。

4. 考 察

(1) 各尺度の因子構造について

社会的スキル尺度については、嶋田ら(1996)で作成された通りの安定した構造が確認された。よって、児童の社会的スキルを測定し比較するために、有効な尺度であると考えられる。ただし、「攻撃行動」「引っ込み思案行動」を社会的スキルの尺度の内容として扱うかについて、項目内

容の妥当性については、今後検討する必要があると考えられる。

次に、自己意識尺度については、桜井（1992）と同じ因子構造ではあったが、本研究では6項目が削除された。桜井（1992）も指摘する通り、小学校高学年は、自己に注目することがよく始まる時期であり、成人期における自己意識とは少し異なる様相を呈す可能性がある。また、自己について考えることがまだうまくできない時期であるため、質問項目の内容を真に理解し、的確に回答することも難しい可能性もある。ただし、自己意識の成長のプロセスを把握していくことは、児童のストレスマネジメント教育にも重要なことであり、今後もさらなる研究を重ね、児童の自己意識についての確に測定し、明らかにしていくことが重要である。

ストレスコーピング尺度は、大竹ら（2001）で用いられた「問題解決」「行動的回避」「気分転換」「サポート希求」「認知的回避」「情緒的回避」の6因子のうち、本研究の分析の結果、「認知的回避」が除外された。

本研究では、青島（2008）の自尊感情尺度に対し、初めて因子分析を実施した。すべての項目が採用され、1因子構造の安定した構造を示した。今後は、他の指標との相関を検討するなど、多面的な妥当性検討を行っていく必要があるだろう。

（2）自尊感情、社会的スキル、ストレスコーピング、自己意識の発達のな変化について

自尊感情については、女子において学年が上がるにつれ得点が有意に下がっており、仮説1は一部支持された。また、特徴的であったのは、3年生では女子が男子よりも高かったのに対し、6年生では男子が女子よりも得点が高かったことである。自尊感情の性差について結果は一様ではないが、松本・山崎（2007）は、3年生と5年生の男女の自尊感情を比較検討した結果、学年があがるごとに自尊感情は低下し、その低下の仕方が女子の場合は大きいと指摘し、本研究と同様の結果が示されている。

また、公的自己意識は学年が上がるにつれて高まる傾向が示唆されるとともに、公的自己意識・私的自己意識どちらも男子より女子の方が高いことが明らかとなった。公的自己意識における年齢による変化は異なるが、性差については桜井（1992）と同じである。桜井（1992）は、自尊感情と自己意識の関係について自尊感情と公的自己意識は負の相関を、私的自己意識は正の相関を示すと述べている。自己意識の発達は、5～7歳頃は外見的な属性で捉え、内面的な視点を欠くが、8～10歳になると他者とは違う自己の独自の存在を積極的に受け入れるとされる。その段階を経て、10歳以降は他者の客観的な評価を伴い自己を否定的にみる時期で、仲間への同調や同一化が強まるといわれている（矢野・落合，1991）。Harter（1998）は、発達の11～13歳頃、自己評価が低下し、それ以降徐々に肯定的になるとも指摘している。このことから、本研究における結果について、3年生では自己の存在を積極的に受け入れている段階で自尊感情が高かったが、他者との比較の中で自己を客観的に捉えようとする小学校高学年になって公的自己意識が高まり、自己を否定的にみるようになって、自尊感情が低くなったと考えられ、特にその傾向は女子において顕著であったと思われる。

社会的スキルに関して、学年による変化は引込み思案行動にのみ見られ、5、6年生に比べて3年生の得点が有意に高かった。引込み思案行動は、積極的に動けずにいる行動として定義されるが、本研究での引込み思案行動は、「遊んでいる友達の中には入れない」など、他者との関係に興味があるが積極的に関係を作る行動をとれずにいるという意味合いと、「友だちとはなれて、ひとりだけで遊ぶ」など、単独でマイペースに動くという意味合いの両方が含まれてい

る。引っ込み思案の定義である積極的に動けずにいるという意味が強い場合、向社会的スキルとの相関がみられると予測されるが、本研究の結果においては、向社会的スキルの変化はなく、引っ込み思案行動にのみ変化があったことを踏まえ、本研究で使用した尺度の「引っ込み思案行動」は、文字通りの意味とは異なる因子として妥当性を検討する必要がある。尺度の信頼係数もやや低めであることを踏まえ、「引っ込み思案行動」を、「周囲と距離をとって行動する」と捉えると、3年生では、マイペースに動く行動をとる傾向が5、6年生に比べて強いが、思春期に近づき、友達との関係をうまく維持していくことが求められるようになるにつれ、単独で行動するという行動は抑制されていくという可能性が考えられる。

向社会的スキル、攻撃行動については学年による差はなく性差が見られ、向社会的スキルは、女子の方が有意に高く、攻撃行動は男子の方が有意に高かった。このことから、本研究で検討した向社会的スキルや攻撃行動については、3年生から6年生の間に大きく変化するものではなく、性別による違いが大きいことが推測される。Eagly & Steffen (1986) は、男性の方が女性に比べて攻撃性が高いことを立証している。また、河村 (2001) や井上・吉田 (2007) らも、「配慮スキル」や「かかわりスキル」など、向社会的スキルの概念に近いスキルに関して、男子よりも女子の方が有意に高いという本研究と同様の傾向を示している。このことから、女子は、他者との関係の維持に対する意識が高く、心理社会的な成熟も男子より早いといわれていること (堂野, 1985) と併せて考察するならば、女子の方が社会的な場面において、相手に一方的に押し付ける方法ではなく、相手を考慮した方法で対処する傾向があるということが考えられる。

さらに、ストレスコーピングの変化については仮説が部分的に支持され、3年生とそれ以降の学年との間に差が見られた。学年が上がるにつれ、問題解決やサポート希求など、より建設的なコーピングスタイルが獲得される傾向にあることが示された。長島・寺田 (1977) は、10歳ごろに発達の質的転換期があることを指摘しているが、本研究の結果とも関係すると考えられる。つまり、3年生から4年生の間に物事を一般化して考えたり、客観的に捉えたりする思考が身につくために、場面に応じて必要な解決策を自ら考えていくことや積極的に問題の解に向けて周りに働きかけていく対処が取れるようになっていくと考えられる。

また、コーピングスタイルにおいても性差が見られ、気分転換は、男子の方が高く、サポート希求と情緒的回避は女子の方が高かった。大竹ら (1998) の結果では、行動的回避、気分転換、認知的回避が男子の方が高く、問題解決、サポート希求、情緒的回避が女子の方が高くなっており、本研究の結果は大竹ら (1998) の結果と一部一致する。一部結果が異なった理由としては、本研究で採用した尺度が、大竹ら (1998) の短縮版であり、得点の幅がきわめて狭く、性差が出にくかったことに起因すると考えられる。また、問題解決やサポート希求をストレスコーピング方略として採用した方が心身のストレス反応を呈しにくく、健康度が高くなり、情緒的回避は逆にストレス反応を呈しやすく健康度が低くなることから、できる限り情緒的回避を控え、問題解決やサポート希求をストレスコーピング方略として採用するようなストレスマネジメント教育が有効である (大竹ら, 1998; 古角・水野, 2009)。よって、本研究の結果も加味し、発達段階と性差に配慮した形のアプローチを行うことを今後積極的に検討していくことが重要である。

(3) 社会的スキル・ストレスコーピングと自尊感情および自己意識の関係について

社会的スキルと自尊感情の関係については、向社会的スキルの得点が高いほど、自尊感情も高く、引っ込み思案行動や攻撃行動の得点が低いほど自尊感情は高かったことから、仮説3は支持

された。またこの関係については、男女ともに同様の結果が示されていることから、性別に関係なく、社会的スキルの高さが自尊感情にも関わるということが明らかとなった。

また、自己意識のタイプ別に社会的スキルから自尊感情への影響を分析した結果、仮説は一部支持された。向社会的スキルは、自己意識の高低に関係なく自尊感情と正の相関をもっていた。Matson & Ollendick (1988) は、向社会的行動は、先生や友達からの肯定的な評価を規定するだけでなく、環境に適応し、他者との衝突をうまく回避することを可能にするとして述べ、子どもの生活のあらゆる側面に関わることを指摘している。つまり、向社会的スキルが高いと、他者から肯定的な評価を受けやすく、集団生活の中での安心感や効力感を得ることができると考えられ、その体験はそのまま自尊感情につながるということが示唆された。一方、攻撃行動に関して、公的・私的自己意識がともに高い場合、自尊感情には影響しないことが分かった。私的自己意識は、自分自身の考えや思いを大事にし、主張するという意味合いが含まれており、この意識が強いと、時に自分の主張を押し付け相手に一方的に関わってしまう可能性があると考えられる。Diamantopoulou, Rydell & Henricsson (2007) は、自尊心と攻撃性の関係について検討する中で、他者からの反応の評価との関連性を指摘している。自尊心が高く、他者からの反応を適切に評価している場合攻撃性は低いが、自尊心が高くても、他者からの反応を適切に評価していない場合は攻撃性が高いという結果を示している。このことから、本研究において、公的自己意識が高いということは他者からの反応を意識する傾向が強いということになるが、小学校の年齢段階では、周囲を強く意識していても適切な評価ができていないため、自尊感情には影響が及ばないということが考えられる。

さらに、引っ込み思案行動については、公的・私的自己意識がともに低い場合、自尊感情に影響しないことが示された。自分自身に対する意識が全体的に低いと、引っ込み思案な行動をとっていてもその状況にいる自分自身に注目することがないため、自尊感情には影響が及ばないと考えられる。以上のことを踏まえると、他者とのやりとりにつまずきを抱えている児童には、向社会的スキルを促進し、少しずつ自分自身に意識を向けられるようなアプローチを行うことが自尊感情の向上につながる可能性があると考えられる。

ストレスコーピングから自尊感情への影響の分析では、異なる自己意識のタイプ間に一貫した結果が得られなかった。本調査では「学校で先生に注意されたときや、友達とけんかしたときなど」と状況を限定して回答させているが、コーピングそのものが状況に依存するため、自尊感情に全面的に影響を及ぼす結果にならなかったと考えられる。また、子どもがストレス状況下に置かれた場合は、「頭が重い」「ドキドキする」といった身体感覚的なセルフモニターの方が重要であると考えられる。しかし、今回扱った自己意識尺度は、通常の状態であり、私的自己意識でも、認知的な側面について尋ねており、身体感覚については触れていないため、自己意識の高低が自尊感情に影響を及ぼすというような結果が得られなかったと考えられる。

5. 今後の課題

本研究では、社会的スキル、ストレスコーピングに焦点を当て、この発現に関わるとされる自尊感情、自己意識について、それぞれ年齢による発達を明らかにし、社会的スキルと、自尊感情や自己意識の関係について検討をした。発達的な変化が見られたものもあったが、全体として3年生から6年生という限定された年齢段階だけでは変化が見られないものもあった。社会的スキ

ルについてはより早い段階での変化がある可能性も考えられる一方、自尊感情や自己意識など、中学生になってからの変化が予測されるものもあり、今後は年齢の幅を広げて検討をしていく必要がある。また、公的・私的の自己意識は、それぞれのスキルによって関わり方が異なっていたことから、社会的なスキルの中でも、どのようなスキルに大きく関わるものなのかより細かく検討をしていく必要がある。

ストレスマネジメントにおいて重要なストレスコーピングについても、本研究では一定の傾向が見られなかった。今後は学業や友人関係、家庭など様々な場面や状況において、どのようなコーピングスタイルをとるかということを検討する必要がある。また、本研究では、社会的スキルが自尊感情に与える影響は、自己意識の高低により異なるとの仮説で重回帰分析を行ったが、それぞれの概念の相互的な関係について明確な因果を十分に仮定できる手続きを行っていないことも本研究の課題である。

しかし、本研究では、社会的スキルの高さが、自尊感情と関わることを示されていることから、他者との関係をうまく築けるようなサポートをしていくことによって、子どもの自尊感情を高める可能性が明らかとなった。友達との関係の持ち方や、適切な振る舞い方を学び、自信をつけられるような予防的なアプローチを検討していくことが重要である。

文 献

- 青島朋子 (2008). 教師編・自尊感情尺度 児童心理, **62** (9), 129-135.
- 傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司(2004). 小・中学生の抑うつ状態に関する調査：Birlerson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) を用いて児童青年精神医学とその近接領域, **45**, 424-436.
- Diamantopoulou, S., Rydell, A. M. & Henricsson, L.(2007). Can both low and high Self-esteem be related to aggression in children? *Social Development*, **17**, 682-698.
- 堂野恵子 (1985). 青年期の特性と指導 堂野佐俊・堂野恵子 (編) 教育心理学要論 北大路書房 pp.43-48.
- Eagly, A. H., & Steffen, V. J.(1986). Gender and aggressive behavior: A meta-analytic review of the social psychological literature. *Psychological Bulletin*, **100**, 309-330.
- 古角好美・水野治久(2009). 小学生を対象にしたストレスマネジメントプログラムの実施と長期的効果の検討—コーピングスキル訓練を通して— 大阪大学教育学部紀要 第4部門 教育科学, **57** (2), 157-169.
- Harter, S (1998). The development of self-representations In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology*, 5th ed. Vol.3. *Social, emotional, and personality development*. New Jersey: John Wiley & Sons. pp. 553-617.
- 井上清子・吉田教子 (2008). 児童のソーシャル・スキル (1) 一性差を中心に— 文教大学教育学部紀要, **42**, 19-26
- 小松はる佳・飛田操 (2008). 児童の自己意識と学級環境の評価が社会的スキルの発現に及ぼす影響 福島大学総合教育研究センター紀要, **5**, 9-16.
- 河村茂雄 (2001). ソーシャルスキルに問題のある児童・生徒の検討 岩手大学教育学部研究年報, **61**, 77-88
- 梶田叡一 (1980). 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Lohaus, A., Klein-Hebling, J. & Snebar, S.(1997). Stress management for elementary school children: A comparative evaluation of different approaches. *European Review of Applied Psychology*, **47**, 157-162.
- Matson, J. L., & Ollendick, T (1988). *Enhancing children's social skills: Assessment and training*. New York: Pergamon Press.
- 松本陽子・山崎由可里 (2007). 小学生における ADHD 傾向と自尊感情 和歌山大学教育学部紀要, **57**, 43-52
- McCreary, M. L., Young, J. J., Jones, M. Y., Pasquariello, C. D., Fife, J. E., Grosz, E., Stewart, N., & Desmangles, J.(2011). Project IMPACT: A psycho-educational problem-solving intervention for children. *Journal of Instructional Psychol-*

- ogy, 38, 124-131.
- 長島瑞穂・寺田ひろ子 (1977). 子どもの発達段階 秋葉秀則 (著) 小・中学生の発達と教育 創元社 pp. 37-122.
- 西岡慶樹・堺井誠 (2007). 小学校における社会的スキル訓練の臨床的研究—セルフモニタリング・フェイズを取り入れた SST の検討—愛知教育大学研究報告, 56, 37-45.
- 大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳 (1998). 小学生のコーピング方略の実態と役割 健康心理学研究, 11 (2), 37-47.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子 (2001). 小学生のコーピング尺度短縮版の作成 ヒューマンサイエンス, 4, 1-5.
- 斎藤勇 (2006). 日本人の自己呈示の社会心理学的研究—ホンネとタテマエの実証的研究 誠信書房
- 桜井茂男 (1992). 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 85-94.
- 桜井茂男 (1993). 児童用セルフ・モニタリング尺度の作成 実験社会心理学研究, 33, 78-84.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1996). 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス軽減効果 行動療法研究, 22 (2), 9-20.
- 嶋田洋徳 (2008). 何が子どものメンタルヘルスを低下させているか 児童心理, 62 (9), 23-30.
- Sharma, M. (1998). Improving intervention that develop problem solving skills for stress management among children. *International Journal of Stress Management*, 5, 250-253.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 寺島瞳・児玉正博 (2007). 他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討 パーソナリティ研究, 15, 313-322.
- 山田竜平・斎藤勇 (2011). 現代の大学生における自己意識とセルフ・モニタリングの関連について 立正大学心理学研究年報, 2, 39-45.
- 矢野喜夫・落合正行 (著) (1991). 発達心理学への招待：人間発達の全体像をさぐる サイエンス社
- 吉川洋子・飯塚雄一・長崎雅子 (2001). 女子学生の社会的スキルと自尊感情およびセルフモニタリングとの関連 島根県立看護短期大学紀要, 6, 97-103.

